

## 〈新刊紹介〉

藤田保幸編

### 『形式語研究論集』

現代日本語を主な対象とし、形式語および形式語に関連する意味・文法的な問題を取り扱った書き下ろし論文集である。具体的・実質的な意味をもった語がその意味を希薄にして、抽象的な文法関係を表す形式に転成した形式一般を広く「形式語」と呼び、それらを対象として現代日本語に限らず方言や朝鮮語にも領域を広げて論じた。形式語の記述研究、コーパス言語学の手法による研究や方言文法・対照言語学的観点による比較研究、形式語に関連する問題をテーマとした論文を収載する。

なお、本書は研究叢書 440・龍谷叢書 29 として発刊された。

「形式語研究の方法論——定性的研究と定量的研究——（山崎誠）」、「複合格助詞関連形式での丁寧形／普通形の対応関係——コーパスに基づいた研究——（服部匡）」、「コーパスを活用した類義語分析——複合辞「ニツレテ」と「ニシタガッテ」——（砂川有里子）」、「「代わり」の意味分析（田野村忠温）」、「複合助詞の品詞性について——名詞を構成要素とする複合助詞を例に——（杉本武）」、「複合辞〈ニ際シテ〉の意味および共起制限（三井正孝）」、「複合辞「～ものなら」について（藤田保幸）」、「集合操作表現の文法的性質（江口正）」、「同一性を表す形式名詞「通り」について（森山卓郎）」、「連体修飾構造中の形式的な「の」「こと」について（中畠孝幸）」、「接続詞の連続使用・二重使用——複合接続詞的使用も含めて——（馬場俊臣）」、「使役文における動作主体を表す「（人ヲ）V・テ」の後置詞性と動詞性——語彙的意味の希薄化と文法的機能の形式化——（早津恵美子）」、「連体修飾節における基本形とタ形の対立（丹羽哲也）」、「複合辞「という」の文法化の地域差（日高水穂）」、「西日本方言における「と言う」「と思う」テ形の引用標識化（小西いずみ）」、「学校国文法と形式語（山東功）」、「文法体系における複合格助詞と単一格助詞の位置づけ——日本語の複合格助詞「～にとって」とそれに対応する朝鮮語の表現をめぐって——（塚本秀樹）」、「索引（事項・人名・語句）」。

（2013年10月10日発行 和泉書院刊 A4判横組み 383頁 12,000円＋税 ISBN 978-4-7576-0675-3）

舩城俊太郎著

### 『かかりむすび考』

本書は、三部よりなり、江戸時代に本居宣長が『ひも鏡』を出版して以降、種々議論の多い〈かかりむすび〉について、多面的に考察し、従来の説を再検討する書である。「第一部 本居宣長の〈かかりむすび〉研究とその関係資料」は、本居宣長による〈かかりむすび〉の法則についての著書である『ひも鏡』と『詞の玉緒』の成立事情を考察する。

「第二部 宣長の〈かかりむすび〉説の受容と誤解」は、宣長が『ひも鏡』で提示し、『詞の玉緒』によって国学者間に普及した〈かかりむすび〉の法則が、江戸時代において実際はどのように理解されていたか、またそれが、明治以降、特に山田孝雄によってどのように理解され、現在にどのような影響をおよぼしているかを、主に〈かかり〉の「は」「も」「徒」および「何」をめぐる明らかなにする。「第三部 〈かかりむすび〉の再生」は、日本の古代語に特有の語法であり現代語には存在しないとされる〈かかりむすび〉について、古代語のそれと似たような呼応現象が現代日本語にも存することを指摘し、これによって〈かかりむすび〉と同じような語法が現代語に再生していると思われることを論述する。

第一部は、「序章 『ひも鏡』の概要とその名称について」、「第一章 『ひも鏡』の類似文献」、「第二章 『三集類韻』について」、「終章 『詞の玉緒』の概要と、第一部でとりあげる資料についての関係まとめの図」。第二部は、「序章 江戸時代の『ひも鏡』『詞の玉緒』についての著述と山田孝雄の〈かかりむすび〉説の誕生」、「第一章 「は」「も」の〈かかり〉と『詞の玉緒』の〈活用〉研究史上の位置」、「第二章 「徒」について」、「第三章 「何」の〈かかり〉——疑問詞疑問文は連体形で終止する——」、「終章 山田孝雄の〈かかりむすび〉説の影響」。第三部は、「第一章 間投助詞と終助詞類との呼応現象の指摘」、「第二章 間投助詞と終助詞類の呼応現象についての考察」。末尾に索引と、附録『ひも鏡』（本居宣長記念館蔵）の図版を収録。

(2013年11月5日発行 勉誠出版刊 A5判横組み 342頁 9,800円+税 ISBN 978-4-585-28010-1)

井上史雄・大橋敦夫・田中宣廣・日高貢一郎・山下暁美著  
『Word-Wise Book 魅せる方言——地域語の底力——』

経済的に活用され、これまでとは異なる魅力を持ちはじめた方言について、方言みやげや方言看板、方言ネーミングなどを記録しつつ新たな切り口からとりあげる書。三省堂 web サイト「地域語の経済と社会」の内容をまとめたもの。「社会言語学」「経済言語学」「景観言語学」などへの写真画像を含む実証的資料提供としての役割を果たす側面がある。身近なところで方言が文字に記される現象が増えている背景には、方言が話しことばから書きことばに機能を広げた証拠と考えられることや、実際に方言を耳にする機会が減っているために方言に稀少価値が生じたと考えられることなどを指摘する。

「第一部 見せる方言・買えない方言」では、方言エール、方言メッセージ、方言でおもてなし、おいしい方言、方言看板・ポスターで交通安全、方言ネーミング・店名、方言パフォーマンスについて扱う。「第二部 買える方言・買わせる方言」では、方言みやげ、方言グッズの広がり、方言の力を試してみる、を扱う。「第三部 広がる方言虫の目図と魔女の目図」では、海外の街角で見かけた方言と、家でもできる方言調査について扱う。これらの三部に加え、冒頭の「さまざまに使われる方言」(カラー写真)と、

末尾の索引からなる。

(2013年11月20日発行 三省堂刊 四六判縦組み 224頁 1,700円+税 ISBN 978-4-385-36526-8)

渡瀬茂著

『王朝助動詞機能論——あなたなる場・枠構造・遠近法——』

本書は国文学と国語学の垣根を越え、助動詞が平安朝の文学作品の場面や章段、さらに作品全体で果たす機能について論じ、一方で従来の助動詞の理解の問い直しを試みる書である。「けり」は「き」との関係が問題になるが、細江逸記の説をその言語観に遡って検証、細江の真意を論じることを通じ、「き」が「けり」とは異なった歴史を歩みながら、「き」もまた枠構造で機能を果たすことを明らかにする。さらに、報告の「つ」や場面転換の「ぬ」、事物描写の「たり」など、平安朝の助動詞は世界の時空を主体的に測り、人の心に働きかけて情動を引き起こし、豊かに機能していることを明らかにする。

なお、本書は、研究叢書441として刊行された。

「Ⅰ 「けり」とあなたなる場の時空」は、「1 「けり」と「り」「たり」の完了性」、「2 栄花物語の周辺の記事における「けり」の多用」、「3 あなたなる場の近江」、「4 完了時制の伝聞性——細江逸記の「き」と「けり」の論に寄せて——」。「Ⅱ 「き」「けり」と物語の枠構造」は、「1 枠構造の「けり」と大和物語の文体」、「2 「き」の情動性と枕草子における枠構造の萌芽」、「3 今昔物語集の枠構造における「けり」」、「4 今昔物語集の枠構造における「き」」、「5 法華修法一百座聞書抄の「侍りけり」と「候ひき」」。「Ⅲ 時空と心理の遠近法」、「1 源氏物語における臨場的場面の「つ」と「ぬ」」、「2 垣間見の「たり」と「り」——眼前の事物をとらえる——」、「3 初期王朝散文の疑問表現と推量表現」、「4 源氏物語の疑問表現と推量表現」。「Ⅳ 作品の叙述の基調としての動詞終止形」、「1 王朝散文の動詞終止形」、「2 堀辰雄「不器用な天使」の文体における動詞終止形」。(2013年11月30日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 356頁 8,000+税 ISBN 978-4-7576-0681-4)

西山佑司編

『名詞句の世界——その意味と解釈の神秘に迫る——』

前著『日本語名詞句の意味論と語用論』（ひつじ書房、2003年）で展開された主張と仮説を基本的に継承しながらも、それをさらに発展させることを目的に編まれた論文集。西山佑司教授古稀記念論文集の意味合いも兼ね、「慶應意味論・語用論研究会」での議論に基づいている。「第Ⅰ部 名詞句それ自体の意味」、「第Ⅱ部 コピュラ文と名詞句の解釈」、「第Ⅲ部 存在文と名詞句の解釈」、「第Ⅳ部 「変項名詞句」の一般化」、「第Ⅴ部 名詞句の語用論的解釈」の5部から成る。

なお、本書はひつじ研究叢書 言語編 第112巻として刊行された。

第Ⅰ部は、「総論(西山佑司)」、「第1章 非飽和名詞とそのパラメータの値(山泉実)」、「第2章 非飽和名詞を主名詞とする連体修飾節構造の意味表示(西川賢哉)」、「第3章 非飽和名詞のパラメータに対する意味解釈 自由変項読みと束縛変項読み(西川賢哉)」、「第4章 「NP1のNP2」タイプF 譲渡不可能名詞NP2とその基体表現NP1(西川賢哉)」、「第5章 「NP1のNP2」タイプD'とタイプF' 「横暴な理事長の大学」と「長い髪の少年」(西川賢哉)」、「第6章 「ウナ重のお客さん」について(西山佑司)」、「第7章 「モーツァルトのオペラ」と「オペラのモーツァルト」、「NP1のNP2」の解釈をめぐって(小屋逸樹)」、「第8章 あの頃のアイドル歌手」について(西山佑司)」。第Ⅱ部は、「総論(西山佑司)」、「第9章 二重コピュラ文としての「AはBがC(だ)」構文「象は鼻が長い」構文を中心に(西川賢哉)」、「第10章 固有名と(疑似)カキ料理構文(小屋逸樹)」。第Ⅲ部は「総論(西山佑司)」、「第11章 名詞句の意味機能から見た存在文の多様性(西山佑司)」。第Ⅳ部は、「総論(西山佑司)」、「第12章 帰属的用法とWhoever節の機能(熊本千明)」、「第13章 変化文、潜伏疑問文、潜伏命題文(西山佑司)」、「第14章 変項名詞句の階層(峯島宏次)」、「第15章 左方転位構文と名詞句の文中での意味的・情報構造的機能(山泉実)」。第Ⅴ部は、「総論(西山佑司)」、「第16章 「よい」の曖昧性とアドホック概念構築(梶浦恭平)」、「第17章 生成語彙論の問題点(梶浦恭平)」、「第18章 自由拡充をどのように制約するか(峯島宏次)。

(2013年12月5日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 586頁 8,000円+税 ISBN 978-4-89476-659-4)

釘貫亨著

## 『国語学』の形成と水脈

本書は、前著『近世仮名遣い論の研究』(名古屋大学出版会、2009年)を継承し、筆者の近代日本語学説史に関する論考をまとめた書である。国語学が18世紀以来の国学系古典語学の業績を継承して成立したことに注目する。国語学は、19世紀後半に言語学と合流して制度として発足したが、伝統の継承を自覚する人々が言語学の理論と対峙しながら独自の理論を形成した過程を叙述する。山田孝雄、有坂秀世、時枝誠記、奥田靖雄らが理論的正統化の根拠とした知識の水脈を復元する。また、国語学の記述法を普及させた橋本進吉の学説史的な位置づけを行う。

なお、本書はひつじ研究叢書言語編第113巻として刊行された。

「第1章 近代日本語学説史の提案」、「第2章 本居派古典語学の近代的性格」、「第3章 本居宣長のテニヲハ学」、「第4章 本居宣長の音韻学」、「第5章 明治以降の音韻学」、「第6章 phonologyと有坂秀世の「音韻論」」、「第7章 有坂の神保格批判と金田一京助との論争」、「第8章 時枝誠記とソシユール『一般言語学講義』」、「第9章 山田文法における「統覚作用」の由来」、「第10章 国語学とドイツ哲学」、「第11章 日本文法学における「規範」の問題」、「第12章 近代日本語研究における教養主義、

「第13章 専門知「国語学」の創業」。

(2013年12月10日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 288頁 6,800円+税 ISBN 978-4-89476-660-0)

来田隆著

『室町時代のことばと資料』

室町時代語に関する論文四点と、資料篇として洞門抄物『巨海代抄』（駒澤大学附属図書館蔵）の自立語索引とからなる書である。抄物や、キリシタン文献を資料として、当時の東西の方言差や、現代用いられる単語の成立について論述する。索引には、『巨海代抄』の原典『巨海代』からの引用語、代語などの漢文体の引用部分を除いた自立語が採録されている。

なお、本書は龍谷叢書30として刊行された。

「Ⅰ 室町時代のことば」は、「一 アカイとアカルイ——洞門抄物語彙小考——」、「二 カンガミル（鑑）の成立について」、「三 セイ（背）の成立について」、「四 『エソポのハブラス』の〈ニ〉と〈ヘ〉について——『天草版平家物語』との比較——」。「Ⅱ 『巨海代抄』自立語索引稿」。

(2013年12月10日発行 清文堂出版刊 A5判縦組み 270頁 7,000円+税 ISBN 978-4-7924-1429-0)

木部暢子著

『そうだったんだ！日本語 じゃって方言なおもしろか』

「そうだったんだ！日本語」シリーズの第9巻で、方言の多様性を紹介する書。具体例として、疑問文のイントネーション、親族名称や応答、挨拶、授受表現などの諸形式とそのしくみの背景にある論理について取り上げ、言語としての方言という側面を明らかにする。また、方言のおかれている社会的現状を紹介し、消滅の危機にある方言を後世に残すための方策について述べる。

「第1章 質問でも尻下がり?」、「第2章 親族を表すことば」、「第3章 さかさまことば」、「第4章 「わたし」と「あなた」の間」、「第5章 方言の将来」。

(2013年12月18日発行 岩波書店刊 B6判縦組み 214頁 1,700円+税 ISBN 978-4-00-028629-9)

京都国立博物館編

『国宝岩崎本 日本書紀 京都国立博物館所蔵 影印』

京都国立博物館所蔵の国宝より、日本文化史上、特に大きな意義を持つ『岩崎本 日本書紀』を全編原寸・原色で影印した書である。高精細な製版・印刷により、流麗な筆致、詳細な書入・訓点を忠実に再現した。石塚晴通（国語学）・赤尾栄慶（古写経学・文化財学）・羽田聡（日本史）の諸氏による解題を附す。

『岩崎本 日本書紀』は、写本・二巻で構成される。旧三菱財閥の自家・岩崎家に伝

来していたことから「岩崎本」の名称で呼ばれる。冠位十二階や十七条憲法の制定など聖徳太子の記事を収載する「推古天皇紀」（巻第二十二）、および、蘇我蝦夷・入鹿親子の台頭や乙巳の変の記事のある「皇極天皇紀」（巻第二十四）の二巻が残っており、双方の写本としては現存最古のものである。

(2013年12月25日発行 勉誠出版刊 A3判変形縦組み 110頁 35,000円+税 ISBN 978-4-585-22071-8)

影山太郎編

『複合動詞研究の最先端——謎の解明に向けて——』

動詞＋動詞型の複合動詞について、現代日本語の研究のみでなく、歴史的研究や他言語との対照研究を含めた多角的な視点からの論文を採録する論文集。国立国語研究所共同研究「日本語レキシコンの意味的・形態的・統語的特性」の中の複合動詞チームの研究活動の成果を出発点とする。

「謎1 現代日本語における複合動詞の仕組み」は、「語彙的複合動詞の新体系——その理論的・応用的意味合い——（影山太郎）」、「語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性について——「～出す」を対象として——（陳劫樺）」、「複合動詞と2種類のアスペクト（長谷部郁子）」、「語彙的複合動詞の生産性と2つの動詞の意味関係（由本陽子）」、「統語的複合動詞の格と統語特性（岸本秀樹）」、「複合動詞「～込む」と前項動詞の格関係——「複合動詞用例データベース」を用いた分析——（山口昌也）」。「謎2 複合動詞の歴史」は、「複合動詞の歴史的变化（青木博史）」、「古代日本語における動詞接続「トリー」の様相（阿部裕）」。「謎3 外国語との対照」は、「V＋V型複合動詞と語形成——トルコ語から見た日本語——（栗林裕）」、「日本語と朝鮮語における複合動詞としての成立・不成立とその様相——新影山説に基づく考察——（塚本秀樹）」、「韓国語の語彙的複合動詞におけるアスペクト複合動詞について——「V-nata」「V-nayta」「V-tulta」の再考と意味解釈を中心に——（全敏杞）」、「結果複合動詞に関する日中対照研究——CAUSE顕在型とCAUSE潜在型を中心に——（沈力）」、「中国人日本語学習者の語彙的複合動詞の習得に影響する要因（玉岡賀津雄・初相娟）」。「末尾の「紹介記事」に、「見過ごされていた外国語文献 Charles Kenneth Parker: A Dictionary of Japanese Compound Verbs (Maruzen Co., 1939) (影山太郎)」、「国立国語研究所 オンラインデータベース「複合動詞レキシコン」(神崎享子)」。

(2013年12月26日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 468頁 8,600円+税 ISBN 978-4-89476-691-4)

清瀬義三郎則府著

『日本語文法体系新論——派生文法の原理と動詞体系の歴史——』

派生文法とは著者の提唱したもので、用言の活用がない文法のことである。日本語の膠着言語としての性質に着目、音素を単位に形態素分析すると、動詞の語幹に接尾辞が接続して新しい語幹を次々に派生し、意味を変えてゆく姿が見られる。本書は、まずこ

の原理を説き、次に現代語全般、文論をも含めた文法論を詳述する。最後に史的研究として、上代以降の大変化たる音便形の発生、連体形に取って代られ消滅した終止形、二段「活用」の一段化などの起因を解明する。

なお、本書は、ひつじ研究叢書 言語編 第96巻として刊行された。

「第1編 派生文法の原理」は、「第1章 連結子音と連結母音と——日本語動詞無活用論——」, 「第2章 日本語の膠着語的性格——日本語の動詞は活用などしない——」, 「第3章 現代日本語動詞接尾組織考——伝統文法批判——」。「第2編 日本語文法新論——派生文法序説——」は、「第1章 有意音 (MEANING-BEARING SOUNDS)」, 「第2章 名詞と接尾辞 (NOMINALS AND NOMINAL SUFFIXES)」, 「第3章 動詞と接尾辞 (VERBALS AND VERBAL SUFFIXES)」, 「第4章 動詞の種々性 (VARIETIES OF VERBS)」, 「第5章 文 (SENTENCES)」。「第3編 日本語動詞体系発達史」は、「第1章 古代日本語の動詞接尾組織」。

(2013年12月27日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 312頁 7,400円+税 ISBN 978-4-89476-563-4)

岸本秀樹・由本陽子編

### 『複雑述語研究の現在』

「複雑述語」に関しての最先端の研究成果を著した論文を集成する論文集である。複数の述語要素を含みながら、意味的には一つの述語としてふるまう複雑述語の研究は、ミニマリズムや生成語彙論、事象構造論など近年の言語理論の発展により言語に対する知見を深める可能性を秘める。第I部では、主に日本語の複雑述語を取り上げ、意味的・統語的關係に関わる制約を最新の言語理論により分析する論文を収録する。第II部では、英語、中国語、スウェーデン語など、形態的には分離した複雑述語の事象構造を分析する論文を収録する。

なお、本書は、ひつじ研究叢書 言語編 第109巻として刊行された。

「複雑述語研究の射程 (岸本秀樹・由本陽子)」を導入とし、「I 日本語の複雑述語」は、「[Nをする] 構文における項選択と強制 (小野尚之)」, 「名詞+ない」型形容詞と名詞編入 (岸本秀樹)」, 「Case, Tense and Light Verb Constructions: A Dynamic Property of Language (Hirotō Hoshi)」, 「使役連鎖の原則とテ形複雑述語における二格の容認性 (中谷健太郎)」, 「非対格自動詞の V-(s) ase 使役他動詞化の可否と 出来事開始時点の可視性 (板東美智子)」, 「V-V Predicates and Restructuring (Florin Oprina)」, 「[名詞+動詞] 型複合語が述語名詞となる条件——生成語彙論からのアプローチ—— (由本陽子)」。「II 諸言語から見た複雑述語」は、「複合動詞の形成と選択制限——他動性調和の原則を手掛かりとして—— (齋藤衛)」, 「現代スウェーデン語不変化詞動詞の項の実現 (當野能之)」, 「Affixal Light Verbs and Complex Predicates in Hiaki Mercedes (Tubino-Blanco, Heidi Harley, and Jason D. Haugen)」, 「事象の所有と複雑述語 (今泉志奈子・藤縄康弘)」, 「英語における複雑述語

——音放出動詞の振る舞い——（磯野達也）, 「英語運動動詞の意味と移動表現（境倫代）」, 「中国語の連動詞構文における意味と構造（芝垣亮介）」, 「中国語複合動詞の語形成と意味 変更を表す複合動詞「改V」を中心に（王蓓淳）」, 「中国語と日本語の結果複合動詞について（青柳宏・張楠）」。

（2014年1月30日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 464頁 6,800円＋税 ISBN 978-4-89476-656-3）

益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦編  
『日本語複文構文の研究』

国立国語研究所の共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」の成果報告書として刊行される論文集であり、日本語の複文の総合的な研究をめざすものである。「連用複文・連体複文編」, 「文法史編」, 「コーパス言語学・語用論編」, 「言語類型論・対照言語学編」の4部で構成される全24編の論文に加え、各部に研究動向や今後の課題を記した解説文を掲載する。

「第1部 連用複文・連体複文編」は、「連用修飾節・連体修飾節構造に関する研究の動向と課題（前田直子・大島資生）」, 「接続助詞的な「のが」の節の文（天野みどり）」, 「いわゆる主要部内在型関係節の形式と意味と語用論——その成立条件を再考する——（坪本篤朗）」, 「連体修飾節における底名詞の性質と名詞性接続成分——連体複文構文と連用複文構文の接点を求めて——（松木正恵）」, 「現代日本語における「～とも」の意味・用法——「～ても」と比較して——（前田直子）」, 「主節の名詞句と関係づけられる従属節のタイプ（江口正）」, 「時を表す名詞を主名詞とする名詞修飾表現について——「ある日」を主名詞とする表現——（高橋美奈子）」, 「外の関係の連体修飾節におけるテンスについて（大島資生）」。「第2部 文法史編」は、「文法史に関する複文研究の動向と課題（橋本修）」, 「上代・中古資料における非制限的連体修飾節の用法バリエーション（橋本修）」, 「上代・中古語の推量表現の表現原理（井島正博）」, 「条件表現とモダリティ表現の接点——「む」の仮定用法をめぐって——（高山善行）」, 「名詞の形式化・文法化と複文構成——ダケの史的展開にみる——（宮地朝子）」, 「例示並列形式としてのトカの史的変遷（岩田美穂）」, 「従属節において意志・推量形式が減少したのはなぜか——近代日本語の変遷をムード優位言語からテンス優位言語への類型論的变化として捉える——（福嶋健伸）」。「第3部 コーパス言語学・語用論編」は、「コーパス言語学・語用論の観点から見た日本語複文研究の動向と課題（丸山岳彦）」, 「現代日本語の連用節とモダリティ形式の分布——BCCWJに基づく分析——（丸山岳彦）」, 「副詞「せっかく」による構文と意味の統制——コーパスにおける使用実態の観察を通して——（蓮沼昭子）」, 「日本語の等位的節接続構造——発話解釈と推論処理単位——（長辻幸）」, 「日本語の語用特性と複文の単文化（加藤重広）」, 「日本語の中立形接続とテ形接続の競合と共存（益岡隆志）」。「第4部 言語類型論・対照言語学編」は、「言語類型論・対照言語学の観点から見た日本語複文研究の動向と課題（堀江薫）」, 「日本語の名詞修飾節構文——他言語との対照を含めて——

(松本善子)], 「中国語の連体修飾節の構造と意味——いわゆる「内容節」を中心に——(下地早智子)], 「バントゥ諸語における名詞修飾節の形式と意味(米田信子)], 「従属句の階層を再考する——南モデルの概念的基盤——(大堀壽夫)], 「主節と従属節の相互機能拡張現象と通言語的非対称性(堀江薫)], 「韓国語の引用修飾節の主節化(金廷珉)].

(2014年1月31日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 736頁 9,800円+税 ISBN 978-4-89476-675-4)

工藤真由美著

### 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』

本書は、標準語を日本語のバリエーションの一つとして相対化しつつ、東北から沖縄に至る諸方言、海外移民社会の言語接触現象を視野に入れ、叙述文の述語の中核をなすムード・テンス・アスペクトを中心に、多様なありようを考察する書である。アスペクトやテンス、認識的ムードやエヴィデンシャリティー、さらには話し手の評価感情という側面が、どのように相関しつつ多様性を生み出しているかについて考察し、多様な日本語のバリエーションを記述するための方法論を提示する。巻末に、前著『アスペクト・テンス体系とテキスト』(ひつじ書房、1995年)で使用した文法用語等を再検討してまとめたキーワード(用語解説)を収載する。

なお、本書はひつじ研究叢書 言語編 第111巻として刊行された。

「I 序論」は、「第1章 はじめに」、「第2章 くはなしあい」における文の2つの側面、「第3章 述語の意味のタイプ」、「第4章 動詞」、「第5章 形態論的カテゴリーとしてのムード・テンス・アスペクト」。「II 標準語のムード・テンス・アスペクト」は、「第1章 はじめに」、「第2章 認識的ムード(叙述法)」、「第3章 テンス」、「第4章 アスペクト」、「第5章 否定述語のムード・テンス・アスペクト」、「第6章 反事実仮想」、「第7章 「らしい」「ようだ」とテンス」。「III 愛媛県宇和島方言のムード・テンス・アスペクト」は、「第1章 はじめに」、「第2章 方言の動態と世代差」、「第3章 述語の意味的タイプと品詞」、「第4章 存在動詞のムード・テンス・時間限定性」、「第5章 運動動詞のムード・テンス・アスペクト」、「第6章 形容詞述語のムード・テンス」、「第7章 名詞述語のムード」、「第8章 否定述語のムード・テンス・アスペクト」、「第9章 実現可能形式と時間限定性」、「第10章 おわりに」。「IV 諸方言における多様性」は、「第1章 はじめに」、「第2章 存在動詞とその文法化」、「第3章 アスペクト体系のバリエーション」、「第4章 時間限定性のバリエーション」、「第5章 エヴィデンシャリティーのバリエーション」、「第6章 言語接触と文法的変化」。

(2014年2月3日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 704頁 7,200円+税 ISBN 978-4-89476-658-7)